文許雜劄

安政見聞録 中

ヲ1
3755
2

門 ヲ1
3755
2

此本何方江来ル
其御覧之上右名
前方江
可ニ下ル
子ニ御返シ

東京帝大圖書
第20641
藏人書

安政見聞録巻之中

○両親を見捨て禍ふあの條

清國地震の物語を少に。或ひハ地裂け山崩れ。まさ〻川筋の変るあり。まさ〻陸地海中に陷り。或るハ地裂け水湧出る。是なハ孫〻とするふ見らべ。然るに江都ハ地震平地に水湧出る。是なハ孫〻とするふ見らべ。然るに江都ハ地震なり。むかしの書にものるとぐ江都ハ地震なり。かゝる変異あるとなり。むかしの書にものるとぐ江都ハ地震なり。

いと稀ふて。往古元禄十六年。大震のあひと少けど。物に記るせるハ白石先生が。折〻柴〻との書に。おゝくことを書れしのこ。

ゝのもとども市中のさゝ。まさ〻何知らず。行方へうけて。ちく懐しみど

も紀さべ。こゞ先生一家の紀者。且八代洲川巻へ住んとて。こちら出

らもゝ小道〻の。武家町家威く。崩れ抜ゞて街ハ人もう遠方に

数多どの。るくごき妻きとゐ。ゐに人の嘘くゐゐん。かくて神田橋の此
方に到り。門人ゐ此舎て馬を備る。夫より八代洲川岸の敷に着づ云。
と紀されるのこ。妻下結方より火ゐどの。起ゐーとのことも見えば。
大震あつて家屋はび必大災発るこ。都鄙とゐにこゐ然り。さはび
この時も所ゐーゐりて。失火ありーのゐん。白石先生ちの頭い湯治
天神下に居ゐ。さて大地震ひ出ー。屋舎揺るこ瓦ゐはび精牙弁
に在るぶぶ。と然はどゐ家て出び。小瓦の崩は落るに及び。ここゐ庭に
出ちゐ。小瓦崩は落ざる以前。若猶損て地出はび瓦ちの他の物落
て。都て怪我をゐるとありとぞ。宜なる哉。遠田の地震ゐ。この類ひ多く
あり。本所に住る何某ゐるの。史婦に女子一人ありて。僕一人を使ひ
けり。この地震のとき親ゐこ。個ゐ憩こーゐ驚きちゐ。起れ。両度に

もゐーきて出んゐるに。戸閉固く頑ゐ開び。妻下僕ゐ孩き覚て。已ゐ邪
魔にゐる開き戸を。ゐ開あけて近出ゐるこ。女ゐい目ゐ驚くことを見つけ。
一人ゐ孩へ地ゐ出て。ちの開戸より外面へ出隣の方へ逃んとして。土蔵の
間を通るに。妻下土庫くちはまち崩は。かの顔巻と唱ふる土のゐくて
と碎け墮て。女ゐい頭上を打にゐり。女ゐい恐へぞ孩へ伏ゐしとき。
土瓦泥ゐ上に落重ゐりて。妻ゐ出さび。ちの傷ちゐ孩に死てげり。さて
ち土と取除ゐるに。女ゐい両眼飛出ー。七竅より血を噴て。うち匿られ
ゐるさゐゐるに。孩ゐ顔は心惑ひ。両親い狂気の如く。歎けどゐ更に甲
斐ゐ。但妻下両親い撫疾の緊ーくて。戸の開ゐるゐ間ーりて。右左
まるまゐ震い止ぬとゐ。於て恙ゐ。えより七の家ゐ焼はざるゐ。女ゐい
いちはやくかの僕ゐ出ゐるとえて。郷導を得て。隣の方へ逃んとして。都く

命を喪ひしに。もゝく生る道なり。僕いとより病疾き故。まゝ土産の落ぬ間に。通りて悪き。かゝる数ひも多くありて。各時の然らしむると。一様にいひ做せど。按るに然ふあらざる人のみとして両親の惑ふを見捐病ど。その悔なるとえて已のことをりて難て避んとせしい第一者心の為きなり。ずや。この巻首に記しる。千住の嫁とい表裏。この女子両親の侍にあらば。緒共に悪あれを。道ましんとして身を逆つ人の居子る者い。よく色を堅むべし

附ていとふ奇しきことあり。江都の近郊上平井い菅天宮祭在て。都下の老若春秋いとふ歩行をもとゝりの多く。人のよく知る所。この地養ゆて裂ることと三町余幅凡そ二間ばかり。深さ数丈といを知らず。通民屋この上に在るりのい半こふ埋まり。況んや

家類別度の類ひ隔るりのい生る処なり。まゝ新吉原の日本堤隅田川の堤も裂こう。まゝ丑ども廣大なりこと。その後人力をもて埋丑こる地成ひへ築出せしー封疆なりど。年歯つとの地固まるとのいども。多く損ぜざるりのあり。この上平井もそのむしー川なりどと埋こしー。あや。但しこのこと後に改くふ。知らざる人も多け丑べ。広大なりちざりしう。行程さのこと遠きふあられど。行て看ざれば。伝偽いきこと。但是このこと上古と殘ふる。日本紀天武天皇七年。筑紫の國地裂ること。廣さ二丈長さ三千丈民屋多く仆壊こう。この時ある百姓家に在しものこと丑こと者〳〵。後州てこ丑こと祝て大に喜〳〵こと。又同十二年の冬。地震して。崩丑殘國寺塔食屋破壊しこ。人民

亡者多く死し。伊豫の溫泉没して出ず。土佐の國莇五十餘の濱
とゝ沒して海となる。この夕べ雷雨あり。能登の國東に峰出。佐渡の
海の西北二面自然に湧益出て三百餘丈さゝに一ツの島となる。
能登の如くなるべし。神津の島で遊る者ゝと云云。とまを云て古代ゝ
ゝ。その書を敷て嗽るのと。寛政年中春岡元稠とのべる人の著し
る。此の年との書に載る。蘆屋の出来島の條に遊し年[illegible]
黄金の樓閣。大燒の後その海中。時く沸騰して海水熱湯となり。西四
に火燃出で。大海の水ゝゝ熱湯となり。海中の魚類大小
の差別なくゝゝ死せ。その海の沸騰する勢ひに乘じて百尋に
跳る。海底より土砂沸上り。新に七ツの島で生ぜり。その第一に
大きなるハ一里七合廻り。その外ハ一里半。或ハ一里ゝゝ。その後海

中の奏繼りて。彼島ゝゝまりて土となる。始めハ島に草木も
なく。滿面白砂のとなりしゝ。何方ともなく草木来り植む初て
草木次第に繁茂し。清水を湧出ハ。ときに周て隅々より。
新潟小濱屋を建。文字を亟めゝ。糸魚の人もあり。頼モ
人の住居あるべし。この樓閣も書老二年。この海燃て天地晦冥
し。夜の間に周圍七里の高山涌出て樓閣と号く。此濱今
ハ人民多く。田畑も多く饒し。この濱の外二ツの小濱あり。ときに文
治年中の比出来りしとの人ハ傳ふ。長崎の工人ハ語るに。信ぜざ
るの事あり。ときに人ども奏き世界のことゝ。のとハ經ゝ。阿
蘭陀より日本へ来る海中一天國ありけるゝ。先年海中に流入し。
今ハゝその国にあり。その巔二ツ。訴く海西に出没ハとハ。新

に出来る落あるべし。まゝ流ぬる品もあるべし。夫れの機関のようなもとせん。また地震に拘らずとのべど。緯の帝にとふ附言に

○地震によりて庄屋の肉を脱する條

古人ののたまへ。元亡こ軍に敗る者へ。春己前ふ崩るゝとも目眩かぎ。鹿前に進むとも。更に恐懼の色なくして。汝て軍を指揮さべし。と

ことは他ふ其の心を動ずれば。胸中昏瞑して臆汁の妻らざると雖

おなり。畢人かくの如くなるべし。平生ことを心にうけて物に

感ずぬ急にあらずして。ようく汁らへて丈夫とのべ。その心がけ

とれい魂ふとまあるとて前後を失ひ後悔おくるべき物なり。譬へば

春火の時に係こそ。肝要の物を捐。或ひい古下法帯の類ひて。

ふ酔て火を避るあり。とは強れふ心惑ひて。手本を失ふなり。

ろふ貧窮の者なりとも。古下法に勝る。家独るゝんや。ことを

忘れて目に観る。義物を先にするとは魂なふあるべき物なり。

されば大学にもことを数へて心雪にあるべきとのたまへり。

雖ども炊えぬ。食へども味ひを知らずとの煩ひを知らずとの恐懼

る所あるべし。その正しきをなずとも見えたり。こふ深川扇橋の

ずとろに出る法業して世を送るのあるべし。のと学けき信仰

に居るべし。然るに遠田の地震にあひ。逃げて外方へ近寄んとする

時。橋の上ふ汗扇落ち。服のあるうを拔まれて。出るとて深き者

しこ居るべ。折かゝその隣家及びにきのりのこふ外方へ近寄

置くして安否を問ひ訪る所ふ。この男妻をあげて。投げけるとよ

叫ぶを聞。こゝふ近よりて見るに胴ようとは外にあり。こゝ近

股のきとう。撃まれてあるうれい。救ふに容易き事なり。と忽ち七八個より集合。かの男の前後を抱く。男もさぞ〳〵脱まんと。ろてゞ効にまと伸て。人〳〵に捧ふと。人〳〵の力を究めう。得大勢のつゝ不ひりて。矢庭にことを曳出しけるとゝ。たゝ右ろく艦へ脱出けるとゝ。槍と初ふ撃まれて。木の棱股ふ冷ひ入けるとゝ力に任して曳ゞ。たまゝ股ふ刺まれて。肉へ徹まて彼方に残る。ゞ白骨のこ。岩れふあるて。血の流ゝ滝のゞく。嘯き苦しむと大ゝ〳〵ゞ。妻子もありけるとゝ。助ふ見ゝとゝ。歎び泣ゝ。ゝ見るとゝ。の辭る。まゝ更にまゝ後き呆れて。いつふとも術をまゝ。かの救ひる人〳〵も只管に呆るのゝ。絶やうのあゝざるとゝ。まづ手負へ事を。き。怪我人を救け載て。医師よ来とゝ。慄げゞ。何方も強ぎの

中ゝまゝ。某も法ひ医師も来ひ。うまゝ医師の来るとも。ことを。燥まる術あゞ。ゞ。かゝて怪我人い指めこそあゞ。術くに疼痛と。苦ゝえて。犯ひ叫び泣悲むと。強へていゝゝ。釈氏の方便。地獄変相の図に画きゝる。到毒焼爨に彷彿として。殿血の業ゝ。法よとあげて。頻ゝふ以面を抱るゝとに。殿に染ざる所もゝ。目鼻にさへ別ゝあまで。鬼ゝ人ゝと紛ゞふゝ。仮初に見る婦女子等い淡き哉慄ざるのゝ。かゝてその次の日に犯ひ死に失ゝけゞ。こゞ指ゝの業くゝ心ゞのゝ見にゝ。箇相の狼ゝと仕出ひゝ。ゝ人い見派を傷せひ。救ゝんとて寄ゝる者七八個のそのゝちふ箇所の一心著ざる。愚人のゝふいあゝざるべけゞど。その多も大喜ふ恐懼て。頻ふ周章慌くまゝふ前後を顧る暇無

きて。こゝで逸早く曳出さば。助からんとのこゝろ。千中にて一個老
と頼るものありて。遂あらんことを乗じ。落る物を拾ふ。その数十
人の膂力をもて。いとも容易きことあらんを。をきふ心の美しく。一丈
を若死せしむる。歎息に堪えざるとのべー
按るにこゝろ張らば。一心用章擾はゝきに。オカ晩こそ働べ。
故に湯を収て沸を正めんと。薪を抱いそ火を救ふの。拙策なる
ことを知れ。されば幼おろ学問を勧め。和漢の先賢自他の始
末のうる者急の場に在ても。明に深むを智者とのひ。英士とも称
べきに。因て余平生に。前を平紀に我る孔子の柵敗を安
倍貞任軍誇ゆそ。故老に及びしこと。義家朝臣矢を青ひ逆ふ
あづまに荒こふ。夜のこゝろ結びふろ』と貞任こゝを頼こゝ年

を終へ一条の乳母の若しさを』と消こゝを義家感ず。その志を優
し慶て。青ひる矢を池め。千まで逆のこゝをしこそ義家の勝軍にて。
心自勇こそのうへ。優美の大将に生まれ。簡竹のこゝろ
然もありなん。貞任脱に柵を敗らるゝ心ふ忍辱を懐くのこゝろ。
この一矢を放ちられば。一命千年知ふ絶んこゝそ。この期ふ及びて心擾
きば。業位那辺の句を駒る。実に英雄の城ふ入らざるべー
てなりぬこゝに業るべー。むかし寛文元年正月十五日。糸師大火あて
大内あるべ。公卿の邸宅多く焼る。その時清水谷大納言。風
早参議などゝ。ゝゝ火を逃て神泉の。道まそゝこと行あひ
し。清水谷こゝを逃て神泉の。道まそゝこと行あひ
ろに言ふ。のひ。風早と。ゝゝ人の火やゝこゝ
ろに言ふ。のひ。風早参議とりあへず清水谷こゝを焼

残らずと對へて立別れたまひしとぞ。公卿ハ常に歌道を学び常
往坐臥に手をはなさず胸臆にあるをもて。かゝる陰撥ハ時にふれて容
易録ドのよくなり。常に心にわすれて常らの部ふ縁ぬべきされバ
我ら常々の心得ふあるべきことなり

○流言を信ずれバ禍を招く條

余が知己なる人聖天町ほとりに。下駄傘など商ひて。丈輝と下人一個を
召仕ふ。然るに此の夜北寝ふあひ。田その近き猿若町より出火して
焼廣がり。既にかの芝居町残らず僅五六軒。衣田勘弥ハ焼倖れけ。
で通まてありしかんもの焼亡に及びしかバ。瑞八方に飛散りて。聖天町
迄ハ小路のきんへ火の付る心地なりしバ。彼下駄など商ふ雄士もすぐ
宅を走り出。丈輝そを携えて。門のきわへ立出るが。その近きの人々

ぞ。こまふ船にうちのりて。向満へ火を避る。この丈輝も諸共に船で隆
ひて彼処へこえくり。知音の方ふいそれなきそ其夜を明しくりけるが。火
ハ大ふ猿まのけるに。右やつが家も焼つゝんに社とも絵あたとあるゝ。
り若狭ねなど遺りをあらバ。拾ひてんといひつゝまた船にうちのりて此
方の岸に揚りつゝるに。芝居町裏手のくゝ聖天町の西側へ燃え出
されど彼雄士ハ東側なるによりて。煙もかくらをこゑる手立てなり。丈ぐる
るよりまゝこ更に家を拾ひし心地して。すぐ家の門ふいくりつ。箇针
を行縁のあらんと知らバ。残箱なりとも持出さんを解りふ簾
の急なるまゝバ。周章て身一ツ逃出しつくまし。なぐら絶ちり。今ハ大
かく残てなく。械の為に奪ハれぬらん。と後悔して戸を引あけ。
経ふ入りて右ひだりを見るに。宵に出る時のまゝにて。塵ひとつの

震後大津浪の圖
澤齋畫

のも失び。遁れ紙ふ不例なり。元七間近く火災あり。猥猥て逃るゝ元い僥倖にて燒殘るとも。家紙い大半城のこあれ。倫まるてめと少く。然るに天刹の地震より。今已の刻ふ及べるまで。絶りもあゝび。人も居ぬ。家ふ在る物の失ぬ。実に有がゝ元

表ゞ代の。四恵こそ尊とけも。然いあもどもそのむ。聖代こと称へる。延喜 天暦の聖世ふぞふ。悪人い絶えびとうん。されべ今の聖世とても。邪心のあるものあゝび。然るに竊盗も猥の族も。命怪ぬ

者のあけもべこの大震に忍怖して姦心も失ふ。あゝん。とかの雄士い絶つてあれ。そもより落も行。怪逆ーの素らんことを懼まつ。已ゞ家に卧もるのゝ。月中こそあまも清暑うり慶き所に仮屋を補理こる

張りゝゝふ出て。疾を順さね者もなけもべ。市中表裏順家と成

中八

て。こもて復まる人さへあゝれど。姦人徘徊せざるとうえて。何方にても物一箇。竊まれうとのゝて使び。場所によりてその仮屋も。二町隔ちーあり。まゝ失ようも程近ゝる。方いあもども。絶くに手門もに在にあゝれば。疾の多ふ来り。恣ふ家紙雜具を奪ふとも。誰

怒るのもるとと。彩家毎にそるゝ。実ふかの雄士ゞのゝるどゝ。紙当も忍怖せーゝべー。快そもとより巳ゝ日を経て。六日七日のゝろけ。

今夜かゝゝび津浪ありて。世を覆る猥いのゝにおよぼず。大川にも逆り神田明神の坂下まを湖大ふ来るべー。と雖ゝとゝく流云ゝ。代ゝ忍懼に魂も。多に副ざる人ゝ当。是と笑より前後とも。そひ測らぞ猿き

て。虚と成て虚と告ゝる。こふ於て。智のふ人婦女小児の輩い忍ま惑ひて力に怯ふ資紙と貧ひ或い荷ひてるき方へと立さると。銭千万とのい

と知るべし。通智量ある人の変じてさるべうべし。心と安んじ止まれと理を説諭せど煩ぎごろ時の勢ひ制しがたく困て家門悉く立遁るりの鮮みるべし。然れども教てるるー。麦下撃て後るに流云るるんと半覚り。悔やこれがくこち厚り。又もびその名不資紛雑具奪ハもー方も多くあるとぞ。又ふ城名その始め人く仮屋に在ー次空しく迫ーと遺憾に名ひ巧こそ箇格の流云るー。人の立遁るて窺ひて恐ふ霧こーるべー。見名のとも縁てよりよく心に恐ありてのるる変美の風説ありとも。その理を悪識るー。実偽を篤と攻へて。その言に惑ハざることそ才知ある人とのそめ元を津浪ハこの本の肯巻にもいへるごー。地震にりて海汀の激流涌きより黒浪こもて皆時陸へうち揚ることを喻へバ盥に水を添へもとりてとを揺動るもに緩けもびその水の揺

るとも多くこ緩ー。至つて烈ー く動を時ハ揺るとも多くこ烈ー。その水盥の外に溢と泝る威勢ハこと波津浪と同理るりされば大震あり已後ハ日を経て海水の泝るべき理るー。その理るけもびその事あるべ。とりて偽の流云るるを察すべー。さらと見程のて浅智愚蒙の者とのもど知るざるとるー。但麦下懼るとの志ーけもびその智昧こそ。かく沙猛きるもふも察知せざるのるんを次推りんと るー。今青ハかるるべ大震あり習ハ極めて最初に勝る大地震ありとのひ異体。余ど知已ひて常にハよく物を察知する士人ありーか。このとのひ出て天ふにるー人とりて。そのーなるの事云ありこの須臾夜とるく激動あり。加海ハ方を膳を ふ勝膳として晴やるるべ星のるも見めくこのふも地震の兆を含む。この風説も根るとこふ

ぎるべしと恐まて絶る。然るふその以外へ出し。鄙人のごとき老媼ども
に個集りてこのことを語り居るに。一人の老媼がいやう。羽黒大権現とのたま
へ。何人かのひ出さるる誠しらぬとのひけまべ。今一個の老媼答へて。幸い天文ふ
精しき人のひ出さるとそう。油断あまべきふあらぬとのへべまこそ老媼冷
笑ひ。ようや天文ふ精しとも何ぞとりてこまを知らん。偶誠ふ識しるる奚為
ぞ最初のとたたのことのそずして。多くの人を迫せ。元にこそざることと
まて語りて止ふり。余傍にこまを受。この老媼を智蒙昧の鄙人とう会え
るぐら。彼士人ふ競ぶまべ識量大ふ当うりけりと微笑して去りしあり。
然まべ人ハ一言半句のことによりて識量とも大ごと察せらるるのと。余が
先年著しる。虎と瀘馬とが説のごとく多ひ合まべし
按るにこまに限らず。或ひハ大雷或ひハ大火まべて人の恐懼する。

時にあらうてまこと何時数日。まこと大雷大火あらんこれ神の託宣。
亦某の社の巫現がトたしー所ごとに曷くたくのひ罵まどその後
あまことる。然るに是等の妄言を伝ぜる人法てのたくこの託宣ある
により。何方の名侍とまを祈つそ。天雷を遠ざみらるまこと火災ハ
人ごの心を著て獲つしー由ふにこの難を脱まこと。このひりてたやに
人も多し。是等の人ふ年ひてに吾を費まこハ早竟之益の所為
なるぐら。試こふとまをのそ雷ハ陰陽の撃まる処祈るとも何ぞ
逃べき。但菅神天雷となりて。糸所ふ裏ん。となせし前叡山
にまり法性房ふ。ようや勅ありとも祈つのみるし。考る云答へく
率去の涙五居にあらざるし。勅令下らべ年ふ。祈らざること
を得んとのへべ。菅神怒りて主処にありし。柘榴を取てにに含。

傍なる杉戸に唾ける。柘榴忽ち火焔となりて。杉戸燃んとす
るを法性房尊を結びて。ことを祈りしに。この夜雲雷
釈書に云へて。人のよく知る所。但信偽い解ーがたし。かまべ名僧
天雷を祈るとの。べらべ。然るにこの夜。古人も多く傷
現を立て。待くふのひあり。まく人の護りにより。火災あらべと
いへども。で一意の理との。べー。然なくとも失火ありて家産を失
ひたけきに。命を失ふもまれ。人として天の元を護らざる者
とのべども時として大火あるい。実に天の命救ある。元明の謝繁潮
が上元の燈の條に火災い自命救あり。士女の遊観い太平の象
云云。このひーとりて察べー

○地震の前後地脈動ふの條

おもて大地の気動ひ陰気上ふありて陽気を南北ど陽気まこと下
に伏せば。発出せんとするにおよびて。地あづうう脈まあづうと。答係を
発るごくなりとの。既ふ前にも縁ーう。かく地中動くにより。地脈
おのづうう動くなり。因て井の水或ひい塩。あるひい減じて常にかる。
てふ去年十月二日。大震の前ようーぶ。濃茶四義前に福田屋と
いへ茶屋のありけるが。駕に乗りて来る人あり。轎夫庭を徘徊
ようーぶ。ここる所あるを。何心なく杖にて突に。忽地清水滾くと
湧出て流れければ。旦人ことをうえて大に驚き。立よりてその傍を穿
ふのよう清泉湧出まべ。人ことを奇なりとして。競ひ来るの市地
ーー。旦人い桶の底を抜き。是を覆ひて井のごくー。汲とりて茶を煎
ざるに。その味ひまこと美なりことを又数く人毎に。で不測のこと

とゐひて地脈の絶ひしハ心ハ着ず。然るにそもより四五月を過てかの大震ありしなり。其後諸方の風説をきくに。あるひハ井の水数丈ハ通きことも半に過ぐといひ。また遠きを備ハとりて。そを以てこそとも名ぶに地脈るひそ水元の差ひぬると疑ひなし。されバ福田屋の庭井に暴に清泉の湧出しも。実に地震の前兆なるべし。余近頃其水をのんで。青く濁りて苔を生ず。かつくに飲に堪ず。是よりまさに数月を経バいかにあるらん知るべからず

周にいふこの時にあたり。安房国の海浜潮干ること。常に競まバ三倍せり。故に汀に遊ぶ小児等。歓びてその干潟に出て。砂を穿ちて貝を拾ふ。適ま逃残りたる潮の中に。鯒鰈など躍りてあまバ。これをとらんと若ものなど。ことごとく干潟にありくあるく。魚を捕

て呼あへ然るに一老人ありて来り。倉卒く山に登りよきなくハ命を失なハんと。声を張つて呼びけれバ。其故ハ知らざれど。老人の呼ぶまゝに。ともかくも連て山へ登りつゝ見れバ。却遥く我を呼びしと問ふ。老人回答てされバよ巳若きし死との岸の潮大に干ることあり。必ずや今日の害に似たり。常に稀なることなるればこそ。歓びて干潟に出貝を拾ひ魚を捕大に興を催しける時。潮暴に逆巻来り。干潟にありしもの一人として一命の全きのところ。その號をきゝ遣せしものなしとも。所謂津浪なり。此津浪来んとするとき。潮十分沖へ引去その来るときハ猛烈にてこれを遁るにいとまあらず。先ずかくとまうしけるが。その詞もまだ終らぬに。澳のかた真黒になり。数十丈とも量りがたく。に

己のごとく潮逆巻逆りて岸を浸し。その浪殘数町を超て。己の
縄を撃ちる者。天地ふ驚きて怖しみどのゝ河もるるとそろ。是
とうんて老若ハ大ふ殘き恐れ。りとの老人ありせべ。三ふ海
底の水屑とるうんを助けらるゝ。と老人を拜
めり。と或人の語りふ。と是駅蝦の伸んとして跳ぶ屋ちると同
一理ふて。海潮暴ふ退くとて。いまと暴に乗ゝんを乗し。
雑を遊べきとり
又ふ余が友の紀已ある人。所用ありて系浦へ登りしふ。安永七
甲寅十一月五日。帰路にあとり。桑名の海を航とけるふ海岸の方
とうんとべ。ちの高ハ凡そ五ど。垂松ざゝとのゝごとく。枝うち交ハ
して動くさる。什麼大風ふとやとあゝど。海上ハ穏なり。故に帆あり

組の者ふ呼りて一同にとまとるふ暴ふ襲の方を思ふ。
今又一方の又えびるとべ。遠ハいりある怪異あゝんと殘き恐れ
者もあり。婁下船長客にのゝ。とまハ必津波ありとや遁る
ふ道なけとべ人ゝ覚悟しのゝ人とのふ彼人ゝて大ふ慰しとのふ
しとうとの雑を脱ぬとまゝべ教てよとのふ船長ふとり。変し
てとまを脱とゝ。で天命に任せのこと者べて彼方を伺とる
る。彼人ゝハとまでなりと所拾ふ物のうち。りと貴く大切
なるを腰ふ括りて覚悟ふ。折うゝ潮満ゝと鳴りて逆浪の。
うち返ハとゝハ所ふ来る船底逆浪の撃ちる音して二三丈
船ハ虚空へ内めき升り。暫くして撃と落とべ。まと逆浪に撃
せられて升るとゝ初めのごとゝかゝするとゝ次上五ゝべ。船中の人ゝ皆

宮の津ホ
旅人津浪を
懼ぢ図

活る心地なく。躍るが如く喧ぐるがごとく。俯て観音の名号を唱ふるのみ。程なく海上穏かなり。船僥倖に恙なく向ひの岸に著けとべ。船中漸生とる心ひとし。悦びあへと限りなし。かくて熟田の澤に上り。見るにたへん大地震ゆて。家いへ山崩れ揺り崩し。或ひは梁棟に壓され泣叫ぶ男女の聲耳を聾ぬき膽に應ぶ。されこの地震によりて海上洋浪せしのみならず。ゆへ悔ろうけるが。今この宮を見るに及び。かゝる美に遭んより。海上に在しこそ遥勝りし。洪福なりきと自ら身を祝し。あと近けとべ熟田ふ縋て。狂狂さを祈らんと踊を狂てかの社へ縋けるに不測なるかの沢より長の程僅八九町の傍にして。宮居ゆしも損ずることなく。社壇に拝し地祇の大恩消ゆることなりしとぶ。

実ふ神恵の貴さを心ふ徹して感涙を流し。暫時祈念してこゝを去る。まさに元の沢ふ出。そもそもより次第に下りけるが道筋をべて飛泥を吹出し。泥こゝにして歩行がたふ人家に一宮に倒れ損じて。食を索むる家もなく。舎るべき方もなし。江都までいまだ遥けきふりふりて測り難んと必へばのよ心細くて。身の力ふ拔て。てこり右左して漸くに仮を索め夜にあとべ崩れ殘り家に舎り。辛うじて帰府なりけりとぞ。千道生ぐ雅義せ物語の多けれど。繁き故にこゝふ略せり

この地震のとき余が知己なる中山何某とのべる人遊歴して後河に居たり。この度海道ふて別て地震の厳しと聞り。その日已刻ごろ中山氏。外の方にこゝ出て。人と物語り居けるが。破裂地

震よとゝ号もあゝび。両足痿て礙と倒れ。起あがゝんとすけ
れども。かの小児ゞ戯れにすゝる懐紙びとゝに弁てゞ縛ことー
てゝ雅ー麦下泥中より烟のごゝ。沙のごきりの吹出て満面を
打ゝゝどに。目にゞふ開きゐび。心昏瞑して前後もゝゝび。暫く
して揺静まり。漸く心地ゝに返り。起よりて見るに家ゝ
斜ー崩れ倒れて。在ー家ゐ似もつぜ。四方に人の泣叫ん
ゝ生あゞ叫喚地獄(蹠ーのゝとあやまゝゝ)心を静めて篤
とゝるに。ゝゞ家も崩ゝのゝ。ゝ尺ばゝ地中へ陷り。衣類調度
も何方にあるゝ。屋根瓦崩れて瘡ひぬれび頭に出さんやうもな。
只管に呆れ惑ふ一圓彩のごゝゝるれび一夕の未もゝゝ。ことを炊
ん器さへゝゐ地中に埋りて。ゝふとも給方なー。殊にこの震

中ノ十五

の井食崩れゝゝ。任意崩れざるも泥吹き入て更ゐ炊ぐきやう
もあゝれゝ人ゝ炊食を彩にゝゝ(ゝゐ江都の地震類ーけれどもかゝゝゝゝ個ー性我人の他方より駭ーきゐ土地
ゐ人の気きゞゆゝのこ)かゝてその翌日に到り。邑の荘屋結方と募り。漸くふー
て来て得つ粥に煮て給ーことび始めて喉を潤せゝ。この中山氏
もその翌日粥を煮ゝゝゝ未刻ゐゝとぞ
あの頃後府に居ゝゝける。余ゞ親族の僕由蔵ゝるりの。此地震
のことを伺ゝーてきゝに。彼地震とゝ程こてあれ。菰格子も
こちこちにめゝくゝと破れ摺け。戸障子倒れ椽さんの束柱一時
に倒れて。外に出んとすれど足もえび。漸くふーて躍び出ーゞ頻ゐ
震ふこと数ーけれび。傍にある大木のやゞて一抱もあらんとするに。
抱き難ーにその大木の幹大ゐ揺はふゝて。ゐて放ゝることゝ九七

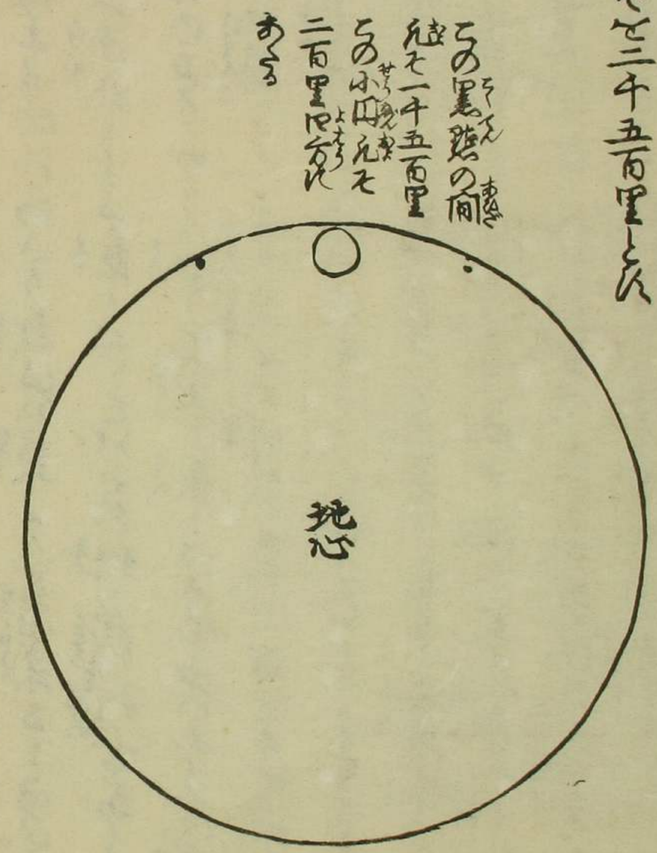
甲寅の十一月
駿河の國大地
震にて泥水
をふき出せる圖

こゝび宜ゝうるこの大水揺まして。伏せたる枝地上に著き。作ぐとゝ八半天にゝは。故ふ迫てこの幹ふおるまゝ。分枝微塵ふ成たりゝ。その先ふき巻ふるにりのみ。然るに今運にして。その悪き地上を得ゝ。直に地上に指びゝりのいさゝに起上はを恢ゝぞ。その下大地大ふ裂て。激泥沙をふた出せば。遍分泥に墜まして面目と分ゝぞ。震止てやゝゝに起上るとゝゝとゝゝども。こゞ眩暈て行歩かゝゝぞ大に躓る人のごし。然るにおよそ半時おりゝて。また揺返しの来ると。初めふ競ぶまゝやゝ緩楽し。夫より時こ刻ふ震ふと救を知らゝび因ておりゝに江都の地震。さゝも猛烈なりとゝゝど。後府の地震と十分とするとゝゝ。七分おりゝふや表ぬゝんゝと怖しゝとなりと伝りき

○地震の方角ふ依て

ゝゝ地震まる時にあゝり。或ゝゝ東より震来るとゝゝひ。また西より来るとゝゝ。南北ふまゝ然りゝ。さまゝゝの記る所。何方あゝんとおりひ慮るゝ。留のごゝ。ゝより発して。里を裏ゝゝりのゝあゝゝ。古書に云ゝ。地球一周九萬里ゝと。是唐土の説ゝるまゝゝ。六町をもて一里とゝる。手ふゝ。是を日本の一里ゝ十六町ゝて。一周一萬五千里とゝる。さまゝゝ地心より地上まで。二千五百里に当るゝ。和漢古今の地震。ゝとむけき考ゝゝゝ。その当の無ぎる所。大抵二百里ゝ方に過ゝ。遠田江都の地震あゝゝ。百里四方にもゝゝるゝ。この廣大なる地球に於て。この微少なる地動のごき。東西南北より来るゝゝあゝゝ。震まる所本ありて。夫より四方へ響ゝ世ゝゝ。ゝの微動の所ゝ来ゝゝ。今試ゝふ次に図ま、

こゝは地球中央周廻凡そ一萬五千里とまゝこの地心とある所より上
まで二千五百里とゝ



右に圓まるゝ。二百里四方と裏うゝ大震い。和漢古今にありや

なりや。その大震ゝ小震のゝ。況やその微なるに於てをや。前ふるいゝ
ゝ。その地に起り。そこより四方へ響くゝるとゝ。来まる方角のある
とゝ。但その心に強く。その端に次第に緩し。之に今般江都の地
震に江都を心とゝすれば。その中にても浅草より。本所深川を心
となし。山の手のゝ市谷牛込大窪の辺を端とせ。江都に元地
震稀にて。元禄十六年の大震より。百六十年ばかりを経ゝとゝ。和
漢ゝゝに。云伝へとゝ。ふるるの事。繁華の地なるにより。大
災に世古より変くあり。周て大をゝ防ぐの術へとゝ。人々震を心を彷れ
ゝ。地震のゝゝ小心を用ひゝ。周て這回の天災に。死亡の者もなしとゝ
笑く。是より以来心ある人。家作及び位置の地。よく擇ぶゝ肝要なるゝ

安政見聞録巻之中終

癸丑二月十八日夜之

壬
創田